# 平成30年度
# 愛知県高等学校家庭科研究会
# 夏期研修会

平成30年8月2日(木)14：00～
ホテルナゴヤキャッスル 銀の間

## 十二単の着付け

講師：名古屋文化短期大学　教授　山田美智子 氏
ヘアメイク：三島由莉乃さん　　モデル：赤瀬 唯さん
（名古屋文化短期大学　学校法人山田学園美容師養成コース）

# ―雅やかな「源氏物語」の世界が広がります―

## 「十二単」はどんな装束ですか？

十二単衣は、宮中に仕える女房たちの正装です。

当時は「十二単」とは言わず「女房装束」「裳唐衣（もからぎぬ）」「唐衣裳姿（からぎぬもすがた）」などと呼ばれていました。現在では正式には「五衣（いつつぎ）唐衣裳」と呼ばれています。「十二単」という言葉が登場する文献は、［源平盛衰記］で入水しようとする建礼門院の装束について普及したといわれています。

## 本当に12枚着るのですか？

一番下に小袖を着ます。その上に長袴をはきます。

この場合、未婚の女性は「濃色（こきいろ）」、既婚の女性は「紅色」を身に付けます。それぞれの着物は裏地を少し表に出して、色の組み合わせの美しさを表現し、その色目には「紅梅」「山吹」などの名前が付けられています。季節にあわせた襲（かさね）色目を装い、中に来ている五衣は、平安時代においては、たくさん重ねることも流行しましたが、贅沢禁止令の影響もあり、次第に五領（枚）が定着しました。ただし、皇族など、特別に高貴な方はそれより多く重ねることが、鎌倉時代ごろにまで続きました。

紐は一つ着付けるごとに抜いていきます。最終的には、裳に付いている１本の紐で結んでいます。現在は、結んだ紐の上に小腰を結んで飾ります。

最後に唐衣をつけます。唐衣の丈が短い理由は奈良時代の装束「背子（はいし）」の名乗りとされ、亀甲紋に蝶臥丸が織り出されています。後ろに裳を付け、最後に唐衣と同じ織布の小腰を結び前に垂らします。小腰には五色の糸が通されています。五色の糸は中国の五行思想から来ています。最後に檜扇を持って完成。

今回使用の五衣唐衣裳の襲色目
**紅梅の匂ひ（こうばいのにおひ）**
葡萄（えび）・萌黄・紅梅色で、濃いものから次第に薄くなるようにして濃紅梅の単（ひとえ）を重ねるもの。

学校法人山田学園所蔵
平成５年購入

### ―背子（はいし）―

奈良時代、女子が礼装の際に着用した袖のない短い上衣。のちには、短い袖をつけた。唐衣（からぎぬ）の前身。

### ―唐衣―

唐衣の生地は、身分により異なり、また士農工商という厳密な階級制度があった江戸時代には、人々の服装を制限する法令「奢侈禁制」の影響を受けて、その時々でも変わった。青色（麹塵・緑系の色）や赤色（赤紫）の「織物」（高級な紋織物をさす語）とよばれる地は、特に許された女性しか着用できなかった（禁色）。また、『西宮記』によると、節会などの重い儀式には「摺唐衣」もしくは「海浦唐衣」とよばれる波の文様を摺った（描き絵の代用品も多い）ものと、赤い目染裳が用いられた。

裏地には通常は菱文の綾を用いる。近世は40 歳未満の女性は裏地に板引といって糊を厚く引き、滑らかな板に張って平滑な糊の層でコーティングして艶を出していた。近世の赤色唐衣は経糸を紫、緯糸は紅で織り、山科流では裏を縹（はなだ　つよい青）とし、高倉流は表と同系色を用いている。

女性神職装束の唐衣は、正絹固地綾無双織小葵臥蝶丸紋、亀甲菊紋、三重欅向蝶、古代葵木瓜文などを用いられている。

## 裳

裳は奈良時代にはスカートのように腰に巻いていたが、平安時代になって衣を数多く重ねて着るようになり腰に巻いていては、歩きにくくなったため腰に当てて結び、後ろに垂れて引くものになった。身分が高い人ほど長く引きずっていた。

腰に当てる固い部分を「大腰（おおごし）」といい、その左右から分かれて左右脇より下へ引くものを「引腰（ひきごし）」。また大腰の左右から出ている紐を「小腰（こごし）」という。

## 仕立て

平安装束の着付けと仕立てを行う衣紋（えもん）道には山科流と高倉流があります。装束仕立ては、1寸（約3.03 cm）を3針で縫われます。使う糸はしっかり撚（よ）りをかけた白の絹糸。今の着物とは全然違う仕立て方で、捻り仕立てなど特殊な技法もあります。十二単を一揃え仕立てるのには2～3カ月ほどかかるといわれています。

### ―捻り仕立て―

布の切れ端に薄く糊を引き、紙縒りのように丸め込むという装束独特の端の処理のことをいう。

### ―退出し仕立て―

裏地を表地より出す仕立ての事で、裏と表または、幾重に重なる色の移りかわりを襲（かさね）色目という。

## 十二単の魅力はどこに？

十二単には、不思議な力が宿っていると感じています。当時の女性が衣装に込めた想いが素晴らしいものです。装束に、長命、子孫繁栄など、さまざまな願いを込めて、身に着けていました。昔は、草木など自然の染料を何度も染め重ねて糸を染め、手機で布を織り上げていました。千年以上前の人たちが大切な衣装に込めた想いを何かの形で伝えたいと思いますと同時に新しい装束の装いを提案できたら考えています。

## 最後に

空蝉（うつせみ）裳抜けの殻（もぬけのから）

## ―名称―

## ―着付け順―

①小袖を着て濃色の長袴

②単にそでを通す

③ひもは蝶結びに仕上げる

④五つ衣の一枚めを着て ひもを結ぶ

⑤一枚目を着たら、単に結んだひもを抜く

⑥五つ衣の二枚めを着る。 ひもを結んでから一枚目のひもを抜く

⑦ 五つ衣の三枚めを着る。 これは「紅梅の匂ひ」

一枚めより二枚め、 三枚め目と重ねるごとにすこしずつ色が濃くなる

⑧五つ衣の四枚めを着る。 ひもは一枚着るごとに、 前のひもを抜く

⑨五つ衣の五枚めを着る

⑩打衣を着る。

⑪表着を着る。

⑫表着にひもをかけ、 先のひもを抜く。

⑬表着の上に唐衣をつける。

⑭裳をつける。 大腰、引き腰、小腰。

資料提供：名古屋文化短期大学